

討論メモ

「地球に住めなくなる日」

令和 3 年 1 月 19 日

1. 1 月は、米国の David Wallace-Wells 氏の表題の著書の日本語訳本の内容について、下記四部を中心に杉浦さんに詳しくご説明いただいた。

- 第一部 気候崩壊の連鎖が起きている
- 第二部 気候変動によるさまざまな影響
- 第三部 気候変動の見えない脅威
- 第四部 これからの地球を変えるために

なほ、配布された資料は、四部、全 24 章の作品のうち、杉浦さんが特に本書で感銘を受けた記述を（ご自身の意見は述べないで）原本から転写された文章です。

史上最悪の山火事の発生、自然災害などが日常になりつつあり、

今我々人間の生活の中から発生するよりも、自然破壊から発生する二酸化炭素の量の方が多いのではないか、などの文章です。その点をご理解の上、資料をご参照ください。

2. 続いて出席者 9 名による意見交換に移り、下記のような意見が出された。

- ・米国の大手メディアなどが、この本をこぞって激賞している。
- ・しかし、内容よりも説得力のある表現をほめているようだ。
- ・IPCC の発表よりも、この本は信頼できる。
- ・産業革命以後、CO₂ の排出が増えたといわれるが、特に 1945 年以後に急増している。

- ・日本はもっと水素社会に向けた開発に資金を投入すべきだ。
- ・水素飛行機の開発で後れを取っている。
- ・水素はどうやって作るのか。エネルギーを要するのではないか。
- ・日本は環境的に、自然エネルギーに頼るのは難しい。
- ・福島沖の洋上発電もトライされていたが、種々問題が発生しているようだ。
- ・原発を活用しないと、日本はグリーン社会の実現は難しい。コロナ対策の失敗も反省しない政府が本気で取り組む覚悟があるのか。

- ・カリフォルニアの砂漠や緯度の高い北欧の風力発電は安定的に寄与している。

- ・寒冷化に向かっているという科学者もいる。温暖化/寒冷化の議論の決着はついていない

のではないか。

- ・ハリケーン・台風、山火事が増えているというが、データで証明されていないのではないか。

- ・ハリケーン・山火事と温暖化の因果関係がはっきりしていないのではないか。

- ・水没の危機を煽るが、海面の高さを測るのは、いろんな要素が絡み合って、とても難しいそう。そうした議論がなされていない。

- ・ツバルの水没が騒がれたが、その後どうなっているのか。

- ・人工の化学物質の環境に与える影響については、この本は触れていないのか。

- ・ファーストフードの影響はどうか。

- ・欧州や日本では農薬規制が厳しくなってきたので、化学物質による汚染は減ってきているのではないか。

- ・自分の勤務した化学会社では、農薬は撤退したし、早くから環境汚染に対する対策を講じてきている。

- ・マイクロプラスチックの影響も今後研究されていくことになるだろうが、いずれにせよ日本はプラスチックの廃棄量が多すぎる。

- ・環境論議では、感情的な訴えが多く、データに基づくしっかりした科学的議論がなされていないのではないか。

- ・そもそも議論の土台が大きく食い違っている。

- ・科学よりも、政治経済が先行してしまっている。

- ・菅首相は2030年にすべて、電動車にするというが、電気はどう手当てするのか

- ・電動車は、走行中はクリーンだが、電気を作る際に大量のCO₂を発生する。エネルギー効率が落ちて、むしろ環境に悪いという説もある。

- ・電動車は都会にとってはよいが、電気を作らされる地方にとっては負担になる。

- ・ガソリン車で日独の技術に追いつけない中国は、原発百基を計画して電気を産出、電動車の時代へと走っている。日本はその流れに追随してよいのか。

- ・自動車は日本の重要な産業であり、国益を考えて方針を決定すべきだ。菅首相の宣言は安易すぎるのではないか。

- ・先の説明で、部門別CO₂排出量の40%はエネルギー転換部門とあったが、この部門は具体的には何を指すのか。

- ・例えば、化石燃料を燃やして電気を作ることではないか。

- ・40%とは実に大きい。驚きだ。

- ・環境を改善するには、マイナス成長を目指せばよい。
- ・聖人君子ならできるが、俗人には無理な目標だ。

- ・これだけの著書を読破するのは大変だ。
- ・訳本よりも原文が面白そうだ。

以上